



廿二
 二編
 下
 後撰
 紀



遠
 1897
 6



門へ遠18
1897
巻6

笑談貧福軍記二編卷之下

浪華 一荷堂半水戯編

第六回 山子の郷は成安蜜計を語る

宅近青山同謝眺門垂碧柳似陶潜好鳥迎

春歌後院飛花送酒舞前簷とい東溪公

の幽居をきくと是所ハをきよハあふびて人情

遠く外又をるき借金○まぢりきんの山後○あうしろは高く此絶頂○このむらちあうを

越る○こも小ハ大口小口の難所○あづまありて一ツもよこと○いそちの道ハ

入道軍記二編

下ノ巻



附む邪川^{よろぎ}にて是^{こゝ}をへて勘定^{かんぢやう}不立^{ふたて}の森林^{しんりん}をぬけ。
 不断^{ふたつぎ}の七曲^{しちまが}り。尽^つ面塘^{めんたう}を行當^{ゆかた}り。惡性^{あくせう}が原^{はら}小
 生活橋^{せいかつばし}。元銀^{げんぎん}梨木林^{りもくりん}の内^{うち}に空手^{くわて}の神社^{じんしゃ}といふ
 あり。この宮^{みや}の手取^{てと}もあいて折^あり人の金^{かね}にてとる角
 か何^{なに}り。まてて社^{しゃ}とこの字^{あざな}を大法寺^{だうほふじ}邑^{むら}といふ往
 昔^{むかし}虚言^{まよ言}山^{やま}大法寺^{だうほふじ}の舊地^{きうち}より今^{いま}もあを借^かり
 のの借^かり人の跡^{あと}尻^{しつ}くらひ觀音堂^{くわんおんたう}回^{まわ}のうまへ小百
 メ目^めをこせても内^{うち}等^らは山門^{さんもん}あり。正^{ただ}食^く堂^{たう}の癩^{らい}

一^{いち}てやま庫裏^{くら}の胸氣^{むねき}のぶとく残り^{のこ}り本尊^{ほんそん}書出^{しゆしゅつ}シ
 鼻^{はな}ろ彌陀佛^{やだつぱつ}へ刀分^{やうぶん}さんの鑿^{せき}作^{さく}して四面^{しめん}二回^{にかい}のへん
 堂^{たう}の跡^{あと}今^{いま}もあを納^なり所^{しよ}にていさう方^{かた}をわけ
 たりとぞ。さすば大法寺^{だうほふじ}の旧跡^{きうせき}あるゆへ立俗^{たてしやく}この聖^{せい}
 山子^{やまこ}の里^{さと}といふ飾^{かざり}えいにて止^{とど}めて是^{こゝ}首^{くび}又^{また}貧方^{ひんかた}の軍^{ぐん}
 帥^{しゆい}上^{かみ}將^{しやう}監成安^{かんせいちやん}の其^{その}先祖^{せんぞ}を尋^{たづ}ねる小^こ貧相^{ひんさう}内^{うち}十
 允^{ゆん}代^{だい}非烈^{ひれつ}天皇^{てんかう}直正^{ちかぢやう}年中^{なかつ}生倉^{なまくら}の不喰^{ふく}例^{れい}食^{じき}
 蜘蛛^{くま}巢^の張^{ちやう}問^{もん}守^{しゆ}家門^{かもん}の子孫^{こそん}よりて父^{ちち}の教^{しやく}并^{なら}街^{まち}内^{うち}

開成とて此仁壯年より天晴醫術不々入りて
 遊道病人来る時ハ一人として快氣者あり。病者
 せ救と敷せまらざれば是を唾棄と云くら免。尚も平
 氣又慮する色あり。係る無類の藪井あまは誰
 あつて招く者あり。其貧名四方又高く唯一錢
 づ又懸ることあり。夕ア又賤布の底を敲き朝
 又米櫃せのする時ハ按腹として夜笛せふさ。
 唯兵茶羅又人せのせ。のすりを以て世せつる。

素性たゞ一貧家にて母ハけ周益店張の女
 其名を於占と咄んる父の周益世を去。後
 隣家あまは洗濯仕郎が婿婦。養育せしき。
 藪井の家又雇はさる。二ハの頃より二九とらふ。さ
 ことばさへるあまは。この術内と契りそ先二三が九
 度の盃ハ廻らぬ内又懐胎回り。安く三四の十二
 分。去りも男の子を産て名を蕩丸と号けり。貧
 る中又成長る。丁度三五の十五歳父術内ハ

不慮も。福國の大優大家金積郷の若君御不
 例又附近国のよしこそ思ひ此街内を召さる
 ば敷井街内喜悅をさす。一世の治療を施して
 本復させて嵩金得人と。吾一族たる拂井玉江進
 清愛と示合せ玉江之神又祈禱を憑こごとくま
 大家館又つる見睨るゝるその上よて日あは
 病氣全快のよし。たしう不請合言上せし又豈
 をくらんや。終又養生不可く。勿君死去し終ひて。

より日頃憎しと思ふる退夜坊道心齋の手扱
 とるりて御布施をたまひ満中院の願までも手厚く
 是を下さしりまば敷井街内間成をト先拂井玉江
 之進清愛も其功とふむるゝくあり忽ち大家出
 入を禁らま初極の當料が喰ちる身は茫路く
 の不浄をふさく心は諸の不浄を起し敷井の
 とも逆意を企圖らぬ匙より心曲りこれありて後
 道心とさへく口論蕪りゝるべ福島下原端よて。

數度の舌戦ると内は彼退夜坊道心へ講中袴付守
 世話焼は加勢をんい浮氣信十郎寺好奥手取右門
 夫武尾土利勸化齋。方居坊行益其外裏家の尼
 講はごがへ其勢都合百万遍。くり出しノ同音
 念佛高く責立きばさーの街内。清愛もこの
 一戦は軍破き玉江之進討死る。藪井ハ其場を切
 ぬけて一先居城又引取て福者を美く道心を憎こ。
 無念の心中やるくさる。此時一子蕩丸を踏近く

招たよせ。口おし涙又言るハ吾過一頃大家の病者
 を活して手柄をゆらり。多分の謝礼を食らんと。
 思ひくどもの運つさる。子息本快るさどし。そ
 退夜坊めの御布施又こらさ其勢憤忘きごとく。
 己を彼奴を責亡し鉢坊主ともあし。さきんと。戦
 せしは云ぐのあく。敵の多勢は味方破き憑切つる
 清愛も。ちらんがん太鼓わうつことゆい。と横笛を
 らぬ大敵の中討死る。せしは吾の諸ともさど

あげさて。漸すすやく一方ひつちうち破やぶり是こゝ直落ちまのび来きりハ。
 吾胸わがむね中ちゆうと告置つげと免めん若わも藪井やぶいの二子にこるぞバ必具かならず又
 是こゝを忘わすれど。鎗操やりう手段しゆん又鍛鍊たんれんあ。時とき丑うしを待まちて
 味方みかたを何なにも免めん福者ふくしやの金かねを貪むさわりとし。其圖そのづ又来きりて
 怨敵あいつくる。退夜坊道心たいやぼうだうしんを破亡やぶらうさせ。吾わがら憤あふを晴はらせ
 て。是こゝは蕩丸のうまると遺言いごんあ。て刀やいばをと。今いまぞこの世よの
 身代みしろ限り。腹はら一文いちもんあ。あへあ。息いきハ。又
 又またる。そ。是こゝより蕩丸のうまる母ははとも。歳月とせつき住す。裏野城うらのしろ

夜よの間ま又ぬけてあ。くも。山子やまこの里さとま。い。この知ちべ
 めと免めん。是こゝ所ところより。父ちちの遺言いごんころ。又止免としま。朝あけ
 暮く手段しゆんとる。と。又原もと来きころ。性せい質しつまで。柳やなぎ
 幼年せうねんの砌せきより。奸佞けんねい邪智じゃちまた。虚言うそごひを。あ。あ。く
 人ひとを欺あやま。金銀きんぎん賤せん室むろより倒たふさ。こと。み。直ただより。へ。と
 ごとく。如何いかか。ど。く。親父おやまで。この蕩丸のうまるの口車くちぐるまに。
 のらざる者ものへ。あ。た。どの弁舌べんぜつと。ど。て。應心おうしん對たい。小股せうこ
 をとる。の術じゆつを。あ。へ。理りを。非ひ。曲まが。て。勝利しょうりを得え。其外そのほか

金福軍記二編

十一



子所あが
 もおと
 梅乃
 指あ
 かな

衝
 長
 結
 高
 助
 成
 成
 成



二
 面
 得
 益
 成
 安
 人
 多
 事
 多
 事

臨機應変の昂吞みどよみして唯の一度も引を
 とうと今ハ四十年の歳をりつひ採事談合一ツとして
 向ふところよごとく。頭低さごとくつとあり。或時
 へ警昌ある場所又十間の表口を張亦ハ馬上又帯
 刀あり。雄ことして在うとこんきバ木綿小紋の羽織
 を著し。一重艸履又扇を紋さごと思案橋又て見る
 ことあり。斯くて年月暮さて内母ハ病又世を去りて
 我一身とるるうらハ彌福者の内實をうらむひ時の

来るを待る。此頃貧田福田の忽ち大乱談せし
 是さいつらの時未だり。巴ま貧者の味方して
 彼福富家をあり倒し。亡父の妾執を晴さんめ
 と。借錢城又推参あり。復好公又對面許さごと
 是やまぐ回らと新智のやど家一又言上るあり
 りるこバ大将スト久並居る群臣。こみ共奇老を
 感伏の余り扱こそ軍師又命。びらき其名を。ユ
 面將監成安と改久重くこまご用ひる。是ハ

成安生立よて。今よの嚮の物語るまじへ。觀宣より
くさつー玉へ。是首よ又銜髮結之丞助成と云ハ
成安が父。數井術内の兄床髮結之進。葛成の次男よ
し。將監成安とハ伯父甥の間あり。然るハ結之丞
助成ハ若冠より。業体修行させんがこゝろ。父葛成が
そくふいよて。福富の老臣。廣井氣能守。胸吉が領地よ
つら。日。口。又通ひりるよ。今日不慮も。山子屋
より。伯父成。蜜書よ。火急よ招く由あるゆへだ。

地又山子の里よ行。伯父成安又對面る。絶て
ひこ。後移かたり。助成両手をむごめづ。今日
某召呼ること。何等の用よて。いと不審。面て
問りま。成安。竟命とら。笑ひ聲をむそめ。こ
申るハ。且下を火急よ呼よせ。ハ。蜜書。談む。一
條あり。夫ハ外あり。此たび。貪福。兩國のた。り。ひ
起るハ。云むとも。定。詳。又。つ。ん。然るハ。試問
盛衰山の林よ。か。い。兩軍。手合せる。一。れ。と。

素より黄金こごうは不自由ふじゆうなれば。敵てきの名なはあふ福留ふくとこ
 るまじべ。あうく。容易やすは倒たふること。味のあじ方かた激ひ
 カの貪ひんせい性せいが。いふかど勇ゆうをぬるふとも。正路ちこうは軍いんを
 とる時ときの敵てきは追おきぬさやよりの。雑用ざつよう雑費ざつひはかひ
 倒たふさき勢いきかひ尽つるの。必ひつ定ていせり。さるふ依よりて吾われ今いま
 一いつの思慮しりょをめぐら。汝なんを以もつて夏なつを謀そり。手てを
 ぐさむ。て安然やすくと味方あじかたは多分たぶんの金銀きんぎん取とり。こ
 謀計ぼうけい首尾しゆびよく行なふ時ときの福者ふくしやの歴ま降参くわんさんさせ。

こと十分じふぶんの仕立しだてはせんこと。若わが器量きりやう一いつツは向むかまへ
 味方あじかたの鳥とりは忠勤ちうきん勇ゆう。下したり計畧けいりやくの圖ずを巡めぐらば。
 首尾しゆびよく接関せつかん仕負しあせる。強つよち貪ひんせい者しやのため。のこ
 らる。女にの意氣いぎある。艶名うらなとして。我童がどう匹三へんさんは増まり
 くる。美名びなを世間よこはむ。と。この義ぎはぬより。美み
 ひくへ。や。いふか。と。譯と示めせば。街鬘まちがみ結むす之の常助じやうすけ成なる
 笑わらひを忍しのび。く。存ぞんる。伯父おふ貴き浮談うぶだん。云いふ。ま。は。な。で。
 ま。づ。其その手て段だんを厚こうせ。こ。ま。某それこと。た。の。游の民ら者ものは。て。

係る貧乏者の大役を命トたよめハ此身又とり回目
この上へへぞ然しハ一命をけりつても味方の大事ハ
勅べりぞど爰又一ツの氣障あり夫を如何とするまじべ
仲間の争や傍輩の口論閑諍と支ちがいのり終
るも由福方ハ吾ホ歲月入こころあが。歴々高威の
檀州でも仕業を問ハ用捨をく頭をえり上又ハ
みでつは心のおふ小騾といくとたもみれた時ハ小僧又直
大同様又呼と下らき頓首こよ天窓にわがは係る

賤き某を以ていふある智畧りまらひども彼妻
飯又て鯉釣とた厚味をみハ一ハ覺束あり。色情
談り丁半の出入引でもあるところら細命又のハハ
とも即座ハウシと美知り日頃の辛るをふ往生
させ味方の勝ハ得る事と。チトこのいさだだ役目の
上。先の場所が大禁物。万一仕損みひこる時ハ味方
この謀計敵よこらき亦某も彼首を志くどり。
忽ち臆子釣上る。このる危と相談よ。この艶男子ハ

ちりよるべ唯、余人もせせましく、不好きと云さ
おし止め。其好艶子が手企るまじ、彼より外勤る
者あり。テア野むのりて、加占ぬくまど。其計畧
の手段とらひ、結之丞ちうふく。 結ハハニア、おどるり

のらちよ、上るりのくこのあまふ。
あまのまわりうらうらひ、三三三三のま

二丁二とある

ハット、MKN... ーらむ...

此時將監らむて立るまじ。其謀計と、余の件は、何
ぞ、彼福方の一老臣、廣井氣能守胸吉が、縁を始ぬ

領分を汝の目に入とむ、思ひ寄る、吾が計策
を兼て、某聞あふ、廣井の自女、徒姫と入る、當歳
二ハの春をぞ、容顔とどど、一のころあ、風流舞
やら、系行は、妙あること、の聴へたり。福者のまじ、
嫁と、まんとて、多く結入ると者あり、と、廣井両親
寵愛の余り、今又縁組らむ、と、何まじ、死の
言、又まじ、是を由りて、明暮、不氣、隨そ、ど、て、ま
あると、由るまじ、是をよ、こと、の幸ひ、あり、と、汝を、取、て

ことと計るの先第一又男はよく仇で氣のこころ
風財よく一入へ二男三金へありきと四藝心得
て天晴極道でたふるへ殊又婦人を迷さす千話
や口舌の妙をえり。浮氣あふこと多しと聞く。
左あまは女習よりへ廣井の館又詣ひく。多年功
者の程をりつゝ徒姪を思ひつゝ首尾よく
かんこと抱つけるの昔計畧の十二分。ある役目の
汝より外又つとむる大将あり。心へするると云れば

助成ありのいさを両手せうち。如何ある手企と思へよ。
色情をさる計畧あらば何し又辞しめよとべし。
其うへ廣井の姫君の某とくより心よへせ種く
程せうり置し又ごうゆら向よも情うある容子早
眼づらふよとさるとしと何せらふよも大家の姫
こと。免角又首尾することあらむが未だの儂よめ
よつとつらとびたひらく愛よよたといなり。彼姫君
あしづなふる。可霄といふる婢ある。この某とく

よりのも。かどよく手ふ入かここそ幸ひ。うやうやしく渠お奴を
 得心させ首尾つくらひせ。先又つふの何より似
 ていとやと。とりてふの某が徒姫を連出のこ
 みて歌の大將黄金のろとも。味方又引入美段の
 いろいろ術又てはやと亦問又せ成安ハ。儲その
 のちハ吾懇丹若ハ姫さへ手ふ入るハ早くも
 館をつぎ出し。吾この閑居又来るべ。斯るを
 上から手段を収。胸吉をむかへ廣井の金庫。

味方へ引こむことハ手の裏へとよりも易し。唯そ
 こ追が汝の働た。のらぎで無上又自惚く。ぬら
 ぎするぞとて立ちへる。心得るる結之丞助成
 語りさうせ。助成ハ莞尔とあて。男こ立のり
 を。あ。脱身さのまへ。トこのとたヌのむの上りうら
 一ヤ面さる。のる計畧あるのうへ尚むい
 やこを十倍してあるうならぬ。目づらひの。とくと
 實否をた。こへ尻目志。の目あ。目目入目

...

...



貧補軍記二編

せむひちりせうふし婢可曹又合圖をさしてせ。
 徒姫の寐所又志のび。浮氣の色を深くもはひこ。
 のち原よりとて女船戀のさすのいひまじと。
 漕ぎ一申のいひめるから唯その時の風又まじり。
 嘯のり出る實を吹く。さぬく手むのさる。
 こと何より成てると安し。可頼母一見其一言を
 るから余の心蕩々人眼よむのしりて大事を
 満してさうか。結その儀へちしつめぬらぬとほし。

御氣づうのすらしむきさる。おぐて妃をばらるるづをせえ。
 落してはさるる。伯父公のあらむとその時よ。
 かりの格氣よをらさく。つたむさるんとてあん
 けき。将のらあ及ん共時こそ奥の間を明く
 人情本ぐり。又さしてせあうん。可ハたのしと
 あるそのさしとげ。そよとさカハ日およむと姫の手
 せむたつき来らん。このあらむ一室を明かぬ。用
 意のしや成安との可。SMよ。

一ノ四ノ五ノ六

一ノ五ノ六

又新^{あらた}りたる趣^{おもむき}向^{むか}せ著作^{ちやくさく}し。追^{おひ}日^ひ次^{つぎ}編^{へん}をい
じつと盛^もりこむべ共^{そのまじり}出版^{しゅつぱん}の時^{とき}日^ひを待^{まち}て。むとへふ
高^{たか}覧^{らん}糸^{いと}がふゝる人^{ひと}。

笑談貧福軍記二編卷之下終

一荷堂半水戲作

笑談貧福軍記

初編二編三編
賣出^{うりだ}し申^ま以^い

歌川國員画圖

このやん
飛舟^{とびふね}はこれ近^{ちか}の美^み後^ご軍^{ぐん}記^きとちがひまじり南^{なん}時^{とき}の人^{ひと}情^{なさけ}又^{また}ゆづらさ。
貧^{ひん}富^ふ貧^{ひん}富^ふの業^{わざ}状^{じやう}さうがら大^{おほ}合^あ衆^{しゆ}又^{また}仕^し細^こさるふ。ほごさるの
さうりま。件^{くだん}ま西^{さい}かこ孫^{まご}をふれむ。後^ごの上^{うへ}まさる。ほごさる者^{もの}上^{うへ}并^{なら}

心齋橋通南本町小入

浪華書肆

河内屋平七版

